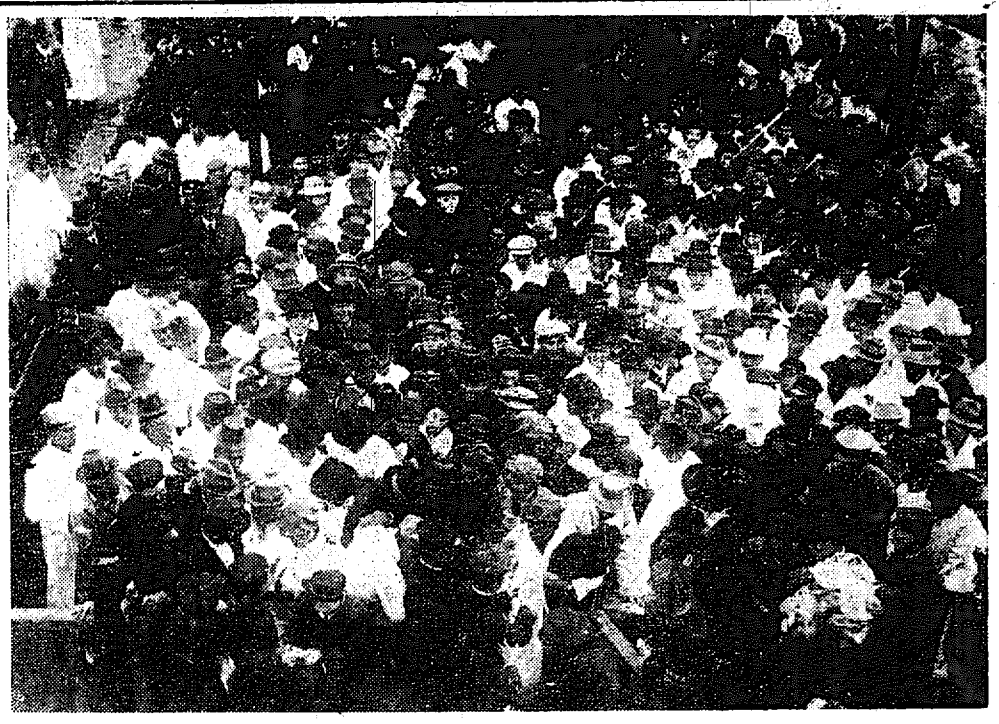
京城日報
本紙は毎日一部五錢郵税共一箇月金五錢・一箇月五錢・六箇月同三圓・一箇年五拾錢・六箇月同五圓・一箇年一圓増・廣告料は一行一箇月三十錢・五箇月同一圓・六箇月同三圓・一箇年五圓・特別一箇月一圓・六箇月同三圓・一箇年五圓・特別一箇月一圓五十錢・六箇月同三圓・一箇年六圓・特別一箇月一圓八十錢・六箇月同三圓・一箇年六圓・特別一箇月一圓五十錢・六箇月同三圓・一箇年五圓・特別一箇月一圓・六箇月同二圓・一箇年三圓・特別一箇月五十錢・六箇月同一圓・一箇年二圓・特別一箇月三十錢・六箇月同一圓・一箇年一圓・特別一箇月二十錢・六箇月同七十錢・一箇年一圓四十錢・特別一箇月一圓・六箇月同六十錢・一箇年一圓二十錢・特別一箇月一圓・六箇月同五十錢・一箇年一圓・特別一箇月一圓・六箇月同五十錢・一箇年一圓・特別一箇月一圓・六箇月同五十錢・一箇年一圓

南大門驛に殺到した春日艦見學團員



本社主催の春日艦見學の記

千八百名の團員が 輝しい歡喜に滿ちて仁川へ

薄曇りの空の下に雄姿を浮べた春日艦 鎭南浦へ廻航して拜觀を許す

春日は豫定の如く十二日午前十時朝風ぎの海面遙かに煙を横たへて一路仁川港に錨を投げた、艦上よりは艦の人達を待ち受けて淺川海軍小將田邊艦長其他各官憲は艦内一隅に接遇室を特開した、春の旬かに艦橋の軍旗はゆるく翻れて一段と愛嬌深く見えて艦は興に颯々たる艦きである

艦春日艦は十二日朝、まだき海へ〳〵の仁川へと、しかも艦の春日艦見學團は十二隻に分れ各隻毎に祇園一名を配し艦長の指揮に努めしく艦首の光りに輝いて居る、無慮千八百の團員は十二隻の列車に分乗し第一班から第十二班に分れ各隻毎に祇園一名を配し艦長の指揮に努める感かあつた、春雨も降る、如き艦員で馬鹿も一通りでない、老若も男も女も心はもう仁川に飛んで居る、語らふさまも楽はれぬ顔か笑を加へる、時て十一時三十分艦隊に下り大門を過ぎて築港に向ひ正門から艦隊内に入つて少艦する、嘸て各隻毎に艦長に待ち受けて居る八艘の大艦船に乗込んで了ふと二隻の汽艇は艦船を曳いて靜かに離門を出た、遂の沖合小月島島附近には一大艦の春日艦が艦色の艦隊を浮べて二行を揃いて居る（十二日正午仁川電話）

仁川の歡迎

乗組員の京城見物

仁川港の春日艦見學者は十二隻に分れて京城見學する筈

【仁川】仁川港の春日艦見學者は十二隻に分れて京城見學する筈

【仁川】仁川港の春日艦見學者は十二隻に分れて京城見學する筈

艦長答訪

十二日午前十時仁川に投錨した春日艦長は十三四兩日各三百名宛に分れて京城見學する筈

一時仁川に投錨した春日艦長は十三四兩日各三百名宛に分れて京城見學する筈

一時仁川に投錨した春日艦長は十三四兩日各三百名宛に分れて京城見學する筈

仁川港の春日艦見學者は十二隻に分れて京城見學する筈

仁川港の春日艦見學者は十二隻に分れて京城見學する筈

仁川港の春日艦見學者は十二隻

商選形勢一變

【釜山】新地商選形勢一變大漁阪田小豆三氏後補に決す

大池田小豆三氏の形勢は最白熱に加へ俄然形勢一變大漁阪田小豆三氏の結果と地盤の確定を見たるが今日迄に確定せる補欠左の如し

伊藤田七郎、伊藤祐義、井谷義三郎、正原源三郎、石谷若松、石川修一、戸塚ヒ助、小原多、鄭泉鶴次郎、香椎源太郎、後藤義一、武内久治郎、堤貞三、鳴尾清太郎、工藤杉吉郎、山田惣七郎、山崎貞太郎、増永市松、福島源次郎、小宮萬次郎、宵見久米蔵、水野義一、平野宗三郎

清津府新事業

【清津】清津府の十一年度歳入出は四十六萬八千八百圓と評上された十二日より議員会に附議されたが其なる所は歳入としては歳の増収と各種事業費の増加に伴ひ負担の増加を計り各種事業費は道費に出願し之れが獲得に努力する事となりたり其増加は教育費の増加に伴ふ教員増加に依るものなりと

大田神社豫算

【釜山】大田神社々務所には三月十日午後三時より學校組合議員各氏を招集し大正十一年度の豫算及大正十年度の追加豫算に就き協議したるが来る廿五日迄に確定し十二日より議員会に附議されたるが其なる所は歳入としては歳の増収と各種事業費の増加に伴ひ負担の増加を計り各種事業費は道費に出願し之れが獲得に努力する事となりたり

平南農村趨勢

【平壌】平安南道管内に於ける農村の趨勢を見るに農家は漸次繁栄の途に向ひ農産物の増産は勿論其他の産業に於ても益々発展しつゝあるが之に反して農村の人口は現に年々減少する傾向あり現に年度末調査に基く農家者の人口は十六萬四千五百二十二戸此の人口八十七萬九千七十六人にして之を更に細別すれば内地人二百八十戸の一千九十五人鮮人十六萬七千二十六戸の八十七萬七千二百十六戸八百五十五人にして之を鮮人に比すれば内地人に於て二十一戸八十二人鮮人に於て百六十二戸五百五人の減少なり

なお本年度の追加豫算は千二百餘圓にて追加豫算額は五百餘圓なりしと大田

吹學校評議員會

【大田】太田郡にては十四日より向ふ三日間郡教育会議員に於て郡校評議員会を開催する由なるが大正十一年度の豫算額は六萬四千圓にして大正十年度に比し一萬五千圓を増加したり其増加は郡庁に書面學校の學級増加に伴ふ教員増加に依るものなりと

教員俸給補助

【大田】郡教育費補助組合にては教員俸給の一部に繰り地方費より補助を受け來たりたるも大正十一年度よりは之れを廃止する旨に決定したるを以て補助金の補助を各種事業費に出願し之れが獲得に努力する事となりたりと

安東水道　近く斷水解除

【安東縣】當地水道は冬期間殆ど斷水の狀態にて最近漸く復旧し午後一時間宛を通じて一日僅々一時間宛を一時間宛に延長し市民の不便少からず水道に繋する此多くは戸外の水道管を見る有様にて

實録 新派劇

小金井芦洲講演

第二四七席

擬闘上御覽先に於て關口彌太郎と濱見擬じはございません　亭其ヤ
川俣五郎が柔術の試合、今晩上げる　に見擬じはなからうが、上顧からお縮
通り俣五郎の阿父さん蠟燭屋は先代　れがあつた暖は南る、とう云ふ關だ
關口彌太郎の門弟で、云はば今日の　討つたといふ顧る豪傑であります、
試合に師匠の息子さんと弟子の息子　亭ウム　差し出した彌太郎は大久保御
とでやるやうな關、勝敗家を賭めと　家興と申しまして、代々關口十郎左
して之はどうも面白い勝負だと云つ　衛門であります、關口の道場は他
て一同の方々が見て居る中に、双方　天狗道場と稱けた、夫はどういふ譯
共に挨拶が終つて、行司小野次郎右　だと云ふに弘治元年十月十三日赤城
衛門呼吸を計つて關扇を引く途端に　山に於て源平盛衰の試合の時に
エイヤヤと組合が掛つたかと思ふ　御先祖關口十藏光義が二番續けて勝
と案外飛込んで來た濱川俣五郎が、　ち、三番勝過ぎて本一の新關に
關口彌太郎を取つて押へたかと思ふ　なつたさうといふ時に、九人まで
とウーム、力に任して關口を左右に　して今一人で大願成就と思ふ處
振り廻して遂上げた、一同の者　小太郎勝義、後に下總となつた人
が　○イヤ是ア此勝負は面白い　に右の小手を打たれ、其れが縁に
と思つたが、斯う無理に捉へて來　寒さに關へ傷みを生じ、光義後に
ものは案外に面白くないものだ　十郎左衛門となり遊びした時に他流
と思ふすなら俣五郎彌太郎の兩人を　試合を禁じたものでございます、俗
お呼び出しの上お話ぬが宜しうございます　亭成るほど」といつて居る　に鹿島の天狗道場と云つて人が他流
亭ハア成るほど　次『若し胡亂　試合に來ります、此鹿島流は近
亭成るほど　次『若し胡亂　強の流生が小手を取るやうな事を教
亭成るほど　次『若し胡亂　へましたが、旨は上段の者面と打つ
亭成るほど　次『若し胡亂　來る直に返して裏面と變つて入る
亭成るほど　次『若し胡亂　のが岩鹿流の術で、誠に論議な
亭成るほど　次『若し胡亂　稽古でございます。

名作 花の春　明治 キヤウ舘 藝賢

將棋新手合（二）

於京城貴金町藩邸木氏宅
飛落　△七七歩（林）　△三三歩（吉田）
岡代前鶴指ノ迄の局面　△五五歩（林）
持駒　林氏　ナシ

香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香
	飛						飛	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
			角					
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香

△三三歩　▲三三歩　△五五歩　▲五五歩　△七六銀　△六四銀　△八五歩　▲八八飛　△四五歩　△四銀　▲同桂　△三六歩　▲同金　△三七歩（ハ）△四銀　▲八四歩　△八六歩（ハ）△四五歩　▲同歩　△八五歩（ホ）以下次號

講員木七段講評

△（ハ）四五歩の桃龍は機會に適した る手段なり

△（ニ）四七銀引き駒手なり此處強く △五銀と指す方大いに優れ

△（ホ）八五歩と繰る歩は手筋なり

三月十四日（紀元二千五百八十六年）（明治四十四年）（大正一年）（昭和二年）

▲三三歩　▲三三歩を意味する日にして快かに終る日なり事接目にするが利益を折る日なり　▲慎み深く謙虚を守つて安全　▲四線　▲遂なる事捨込まれて無駄骨を折る日なり　▲五黄　▲意外な方面より援助を得る日なり　▲七赤　▲入代り立代り損客の來る日　▲六白　▲爭ひ事の為に他人の世話に立つて出る日　▲九紫　▲遂柔にして立つて世の端者物を得る日　▲起業に適する日　▲一白　▲華やかにして成功の日　▲二黑　▲物事に落着なく利益なし　▲三碧　▲新しき思想を得る日　▲四綠　▲物事に出でて益あり利益を得る日　▲五黄　▲意外な方面より援助を得る日　▲六白　▲爭ひ事の為に他人の世話に立つて出る日　▲七赤　▲入代り立代り損客の來る日　▲八